

にぎりが一個四百円

私の学生時代はアルバイトの連続であった。学費のためと言うのだろうか、それとも生活そのもののためにと言った方がよいのだろうか。講義もそっちのけでアルバイト三昧の学生生活を送っていた節がある。しかし単位も人並みに取得し、無事卒業もしているので経済学部という所は如何にも便利な所である。

昼間のバイトで足りず夜は家庭教師もしていたが、こちらの方はもっぱら夕食をこ馳走になったり、夜の街に繰り出す父親のお供をするほうが本職であった気がしないでもない。

「先生、週末は家族でスキーに行くから良かったら一緒に行きましよう」と太っ腹の親父の言葉に甘えて、生まれて初めてスキーに行ったのは越後湯沢であった。

清水トンネルを越えていきなり雪国となり眩しいくらいの銀世界に感動したが、肝心のスキーのほうは何をどうしたかさ覚えていない。

ただ一つ思い出すのはホテルの寿司屋で生まれて初めて江戸前のにぎり鮓をつまんだ事であり、こちらは生涯忘れる事が出来ない。

「先生トロでもどうですか」と親父さん。トロって何だろうと思いつつ、言われる

ままにカウンターの隅でカチコチになっている私は、もはや好奇心の塊でもあった。ふと見る値段の木札にはトロは四百円とある。肉体労働のアルバイトをして千円貰えばよいほうの時代、トロ四百円に正直驚いた。しかも寿司は二個セットで出てくるので、どうみても八百円・・・と考えていると金縛りにでもなったみたいで暫くは食べる気にもなれなかった。同時に涙さえ出かかった。

「世の中わからない事が多すぎる。貧乏である事は辛いことだ。にぎりのトロとはこんな物とは知らなかった」と思いつつ口に運んだトロはこの世の物とは思えない程おいしかった。

時代も移り世の中全体が贅沢になった現在、寿司を食べてここまで感動したり驚いたりする学生はいないであろうが、逆に寿司一個でこれだけ勉強できた昔も懐かしい。私はこの事がきっかけでより逞しい人間に育っていったのではないだろうか。

今でも寿司屋では開口一番「トロっ」と言いたくなるのは、あの時の夢が実現した喜びからか、それとも学生時代から続くヒガミか見栄か、私にはよく分からない。